



牛といっしょに赤道越えて!

アンガス輸送航海記

河津幸齋

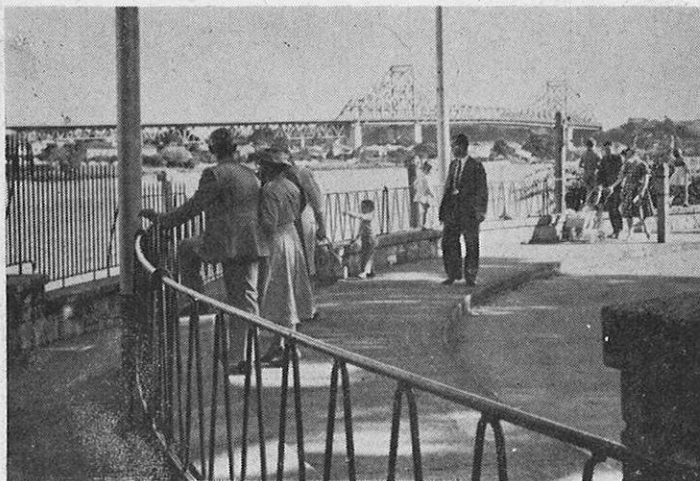
濠洲から、はるばる海上輸送される肉牛たち……。
 せまい船中では、死んだ牛を解剖したり、核実験の放射能に
 神経をとがらせたり……。これは受領に行つた県畜産課
 技師が語るウラばなしの数かず……。

美しいシドニーの街へ

小国町が画期的事業として輸入する代
 表的肉牛アバディーン・ア
 ンガス種牛第二回目の受領
 の役目をうけたまわった私
 は、小国農協の今村さんと
 共に、四月二十七日十七
 時、羽田を発ち、翌二十八
 日二十時には目的地の濠洲
 シドニーに到着した。

空港には堀さん（農林省
 派遣シドニー大学留学生）
 と坂口さん（輸入商社員）
 の出迎えを受け、ホテル
 「メトロポール」に旅装を
 解いた。

翌二十九日の日曜日は市
 内を見学したが、広大な植
 物園はよく管理され、濃緑
 の芝生は市民の唯一の憩い
 の場所のようであった。
 対岸にある動物園は自然
 の地形が利用され、水族館
 も附設されてあつてスケー
 ルの大きさに驚いた。



シドニーにて……前方の橋がハーバー・ブリッジ

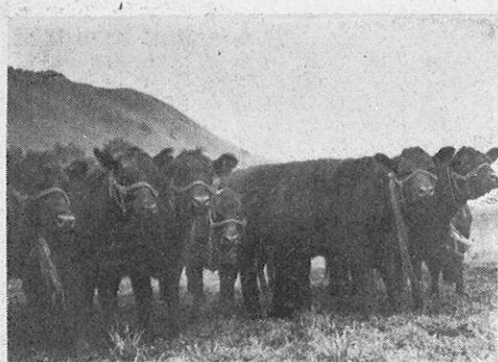
湾に架けられたハーバー・ブリッジは
 お国自慢の一つのようで、港の風光明媚
 は世界三大名港の名にふさわしく、実
 に素晴らしい眺めであり、高層ビルが建ち

並び又、古風な建築は静かな街を一層落
 ち着かせている。
 当日は天皇誕生日であつたので、堀さ
 んの案内で領事公邸を訪れたが、百人近
 くの邦人が集つて陛下のご誕生日を祝賀
 し、故国を偲んでいた光景は今も忘れら
 れない。

オーストラリア人の対日感情はよく、
 親切である。また市内で特に眼についた
 ことは公衆、交通の道徳が徹底している
 ことである。
 シドニーの空は空気がよく澄み、靴を
 磨く必要もない程さわやかなものであつ
 た。

搾乳もオートメデ

郊外に出ればすぐに牧場があり、乳
 牛、豚、緬羊、馬が飼われており、肉牛
 地帯は奥地になつてゐる。

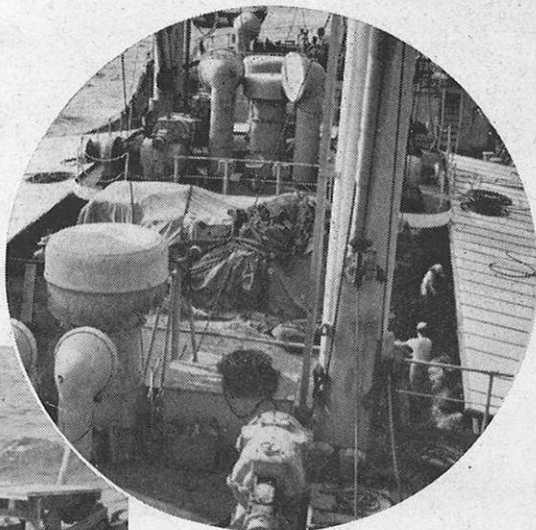


放牧中のアバディーン・アンガス

ヘアフォードの牧場を見学し
 たが、わずかに三人で三百三十
 頭を省力的に飼育していた。
 ヘアフォードは毛色がコゲ茶
 で、顔と腹が白い重そうな牛で
 ある。
 又「ロートラクター」と呼ば
 れるオートメーションの搾乳場
 も見たが、連続的に五十頭ずつ
 自動的に搾乳される大規模のも
 のである。

南十字星に祈る

五月四日、いよいよ九十二頭
 のアンガスを船に積んで同夜シ
 ドニーを出港した。
 牛は甲板に急造された丈夫な



牛舎に収容し、朝夕は
 ルーサンの乾草を与
 え、昼と夜には十分の
 水を飲ませる日常管理
 が始つた。
 三日目毎にボロ出し
 をして牛の清潔を保
 ち、人慣れのしていな
 い牛には餌を与えるた
 びごとに顔をなでては
 甲板上の畜舎はきゅう
 くつでした。

牛の解剖で対決

酷暑の赤道下も無事通過した十八日、
 突如一頭の牛が発病した。リングル注射
 やその他可能な限りの治療を尽したがそ
 の甲斐もなく、翌夕むなく斃死した。
 生前、私は創傷性の腹膜炎と診断して
 いたので、病因究明のために解剖するこ
 とに決し、船長と船医に了解を求めた
 が、はからずも船医の反対と牽制により
 難行した。船医は「死んだ牛が伝染病
 で、もしあなたに伝染でもしたら、あな
 たを水葬することになるかもしれません
 よ。」と極言した。

その理由は、大陸の熱性伝染病ではな
 いかとのことで、乗組員五十余名の生命
 をあずかる責任と、消毒薬もない船中
 の解剖を拒否したことは、むしろ当然で
 あつたかも知れないが、私としては、護
 送の責任上、死因の究明もまた当然のこ
 とである。

胃の中に大針が

私は決意の程を船長に話して翌朝許可